

上野 友子・武石恵美子 著

## 『女性自衛官』

——キャリア、自分らしさと任務遂行

浦坂 純子

(同志社大学社会学部教授)

『女性自衛官』とは、また直截なタイトルである。日本は災害大国であり、自衛隊は有事の際の頼みの綱として認知されている。折から国際情勢の悪化が続いており、「国をどう守るのか」を誰もが考えざるを得ない時代となっている。その最前線に位置するのが自衛隊であり自衛官であるが、任務遂行には命の問題がつきまとうだけに、単なる仕事、職業の一つとして捉えるにはかなり特殊な要素を含む。ましてや「女性」となれば、そのハンディキャップの大きさは想像に難くない。

実際、本書によると当初は看護師（婦）資格を持つ女性に限定した採用から始まり、一般職域での採用に至ったものの、女性が配置される職種・職域の制限が撤廃されたのは、わずか数年前の2018年だという。医官などを除く一般自衛官の女性幹部（尉官以上）は1281人（幹部自衛官全体の3%ほど）であり、本書のインフォーマントとなっている佐官以上の女性幹部となるとさらにレアケースである。したがって、著者が冒頭で「特殊な環境にいる女性の話、ではなく女性に共通するキャリアの現状に迫りたい」と述べていることに、やや違和感を覚えたのも事実である。

本書は著者の一人（上野友子氏）が社会人大学院生として取りまとめた修士論文がベースとなっている。防衛省の職員である上野氏でなければ、このようなリアルな聞き取りはできなかつただろうし、分析視角にもその職業経験が活かされている。一般人にとっては未知の領域である自衛隊や自衛官について、学術的な調査に基づいた知見にアクセスできる



●光文社  
2022年3月刊  
新書判・261頁  
定価946円（本体860円）

●うえの・ともこ 防衛省防衛事務官（現在、内閣府出向中）、法政大学大学院キャリアデザイン学研究科修士課程修了。  
●たけいし・えみこ 法政大学キャリアデザ  
イン学部教授。

という意味では非常に貴重であり、興味深く頁を繰ることができた。社会人大学院生ならではの貢献であるといえよう。

読み進めるうちに気になったのが、インフォーマント20人の語りである。本書では随所にこの20人の発言がそのまま引用されている。この20人に関しては、佐官以上の女性幹部であり、既婚で子供がいるという大まかな属性しか明らかにされていない。つまり、個別の発言者の年齢や所属、家族状況、どのような経歴なのかは一切不明である。加えて、Aさん、Bさん……というような匿名での個人特定もできないので、ある章で発言を引用された人が、別の章ではどのような発言をしているのか（していないのか）さえも分からない。

この扱いが、本書で伝えることができたであろう情報を減じた可能性は大いにある。個々の女性自衛官のキャリアを論じているのだから、例えばどのような経緯で自衛官になった人が、どのような壁にぶつかり、どのように家庭との両立を図ってきたのかという関連こそが重要であり、踏み込みたい点である。しかしながら、それをするとな数少ない上級幹部ゆえに個人が特定されてしまう恐れがあり、このような記述になったのだろう。その限界が残念でもあり、やはり特殊な世界であることを実感させられる。

政治家でも芸能人でも世襲が目立つ昨今、女性自衛官も例外ではなさそうである。自衛官である親族などを身近に感じてきたことが目指すきっかけに

なった場合が多く、パートナーも自衛官である割合が高い。したがって、家族ぐるみで自衛官の立場には理解がある。だからこそというべきか、驚くのはそのプロ意識の高さである。「国のために」という使命感や責任感の純度は高く、普段は自分らしいキャリアを模索しながらも、有事には即応態勢で臨むという覚悟を持ち得ている。それゆえ上級幹部まで昇進してきたのだろうから、片やその環境に適応できなかった存在にも目を向ける必要があることは間違いない。とはいえ、男社会で戦い、自身のさまざまな葛藤とも戦い、国難にあっては戦闘も厭わな

い。それを実に自然に、当たり前のように受け入れているのが本書の女性自衛官であると強く印象づけられた。

こんな戦い方はできないと思う女性が大多数だろうが、評者も含めて働き続けている女性たちは、程度差はあれ戦ってきたのだと自覚する。極めて特殊な世界を垣間見るようでありながら、「働く女性全般に共通することを、シャープに切り取ることができた」という著者の自負には納得した次第である。